

断層の曆から幻を求めて!!

実存のメタフォールと土着のエトスにからまれたアンバランスに幻が怨恨を産み怨恨が幻を再生産するパトスの環の再生を!!

文化部連合会企画

蒼ざめた今から《何かをする》には

シンポジウム

講師 篠田正浩
村木良彦
北沢方邦
出版反戦代表

5月29日 P・M 2:00 | 1 番教室



マグネシウムがたかれた時、蛇腹式の大型カメラの中に無表情な乾いた〈面〉をかぶった妊婦が我々の可視の領域に一つ……皮膚は男たちの性液の充溢に濡れて、腹部には〈目的意識的〉な手術の刻印を残し……この女は不妊かもしれない……腐爛した個人の怨恨の拡散した精虫が群がり、赤むくれした腹は吐息する度々に前方にせりだしてくる。情況の混沌性の中で混迷と低滞に悶絶しつづけてきたお前、茫茫たる論理の逆立ちした原野で不妊症のお前の腹を横揺れさせるのはオレだ。(カット カット カット アホか おメエ)メスをいれなければいけない俺にとって生まれてくる胎児の生死は《分娩》の時間の差異にたよるしかない。一時間の経過のもつ異質性を信じて—

我々がこの妊婦にメスを入れようと、大衆とインテリゲンチヤのシーソーゲームを開始したとき、人間の意識多極分解を志向性における多面的分散としてとらえ史観を定立させ、志向性の普遍化をはかろうとする論理の脆弱性(カット カット カット イイスギダー おメエ)から、個・ムードの意外性の発覚、志向性は手段のプロセスであって決定時における絶対崩壊が意識の多極分解であるといったような運動論における不毛性は存在のバリエードの中で燃やしつづけてきた情火を、個人の怨恨という精虫によってはらしていくといった論理ベクトルを生み、メタフィジカルな個的當為の追求、個の存在認識、文化の自律性というプロセスを経て、サークルの全的風化と個の可視化(即ち虚構連帯から孤立へ)と展開していった。個の論理が不振の文化運動に膠着性を定立させようとする仮構深化がその延長上にフィジカルな自己燦祭、実践基盤による鋭さ、現実的運動における空洞化現象を生みだすのは現実か? 観念・実践領域における個が組織における運動論までを領導した時、個の不条理が思想基盤の質の向上はあっても、マージルの現実との縫目をひきちぎっていくのか? 個の追求という後退戦を「古くて新しい問題」として幾多の論書が核の同質性にもかかわらず、微妙な振幅を用いたり、皮質の錯綜を行なったりして「個の再認識から復権へ」と言語に表わす時、既に意識の輪郭が不確定に崩壊し、現実への触感は違和感と喪失感に充ちた物になり、言語そのものの人称は表情のない〈面〉を持つだけになったのである。

我々は知識的手淫になりたくない。生まれてくる胎児の生死は《分娩》の時間の差異に頼るしかないのだろうか……時間の経過のもつ結果の異質性を信じて……文化運動のモメントは断絶の連続であり、理論との絶えまない乖離運動である。(カット カット カット 安田アッ イイスギダー) 自己の内的追求とその運動による外化を、現在のあらゆる文化領域の人々に集まってもらって、公開討論会を展開しようではないか。